

山田寺第2次発掘調査現地説明会資料

奈良国立文化財研究所・飛鳥藤原宮跡発掘調査部

奈良国立文化財研究所は、昭和53年1月17日より山田寺第2次発掘調査として金堂跡を調査してきた。今回の調査地区は、残存している金堂の土壇を中心として、北回廊推定地を含む約2050㎡である。調査の結果、金堂の基壇規模が確定し、平面もほぼ明らかになることができた。さらに、北回廊を検出したほか、金堂正面に礼拝石や石灯籠台座などを発見した。

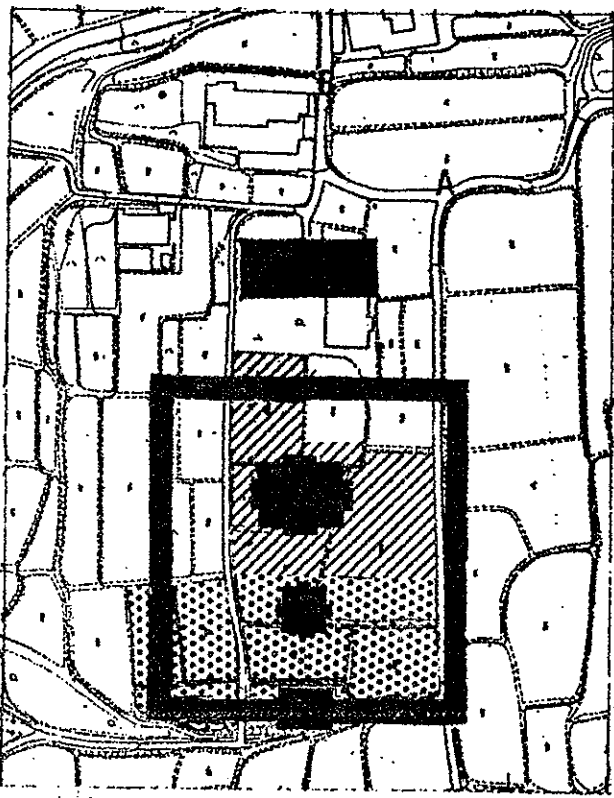
I 遺構の概要

1) **金堂** 基壇規模は地覆石の外周で桁行24.6m×梁行17.9mである。基壇高は、犬走り敷石上面より礎石天端まで約2mである。四辺中央部には階段があった。西階段は、階段の最下段の踏石の大部分と耳石の一部が残っている。耳石の北面には浮彫りが施してある。

基壇化粧は、西北部で花崗岩の地覆石が残っている。この地覆石上面には羽目石を立てた位置に欠き込みが施してある。凝灰岩の羽目石の一部が西北隅に残っている。

犬走りが基壇の四周を回り、階段の出に対応して四辺中央で凸字形に張り出している。地覆石から犬走り縁石まで約1.6mであり、四周の階段部分とも同じ中である。犬走りには長方形の通称榛原石を4列敷き、縁石を立てている。ごく一部に凝灰岩を使っている。

金堂の上面では礎石2個が遺存していた。また礎石抜取穴を12ヶ所確認した。この計14ヶ所でわかる柱位置から、金堂の平面が明らかになった。身舎は桁行中央間15尺、脇間6尺の3間で、梁行は9尺の間である。この身舎に9尺の庇が取りつく平面の型でありながら、側柱列は桁行では1間15尺の3間、梁行では1間18尺の間とする極めて特異な平面であることがわか



● 第1次調査
▨ 第2次調査

った。この平面から、構造的には法隆寺金堂のように雲型肘木を使っていることが予想され、雲型肘木の割付は、玉虫厨子にみられる扇形の配置が考えられる。

山田寺金堂は7世紀中頃の金堂としては平面やその構造をも推定できる建物として唯一のものであり、貴重な遺構であることが明らかになった。またこの金堂の構造が法隆寺に先行する時代のものであり、法隆寺金堂へ発展していくことを示唆するものである点も注目される。

2) **礼拝石・石灯籠台座** 金堂南面に240cm×120cm、厚さ25cm以上の大敷石が1枚敷いてある。この敷石は犬走りの縁石に接してその外側にあり、金堂正面にあって礼拝する場所と考えられる。

この礼拝石から南へ2.70mのところには石灯籠の台座があった。台座は、灯籠の竿の杵を穿った花崗岩の上に凝灰岩で八角の台座をのせ、その上面に、複弁八弁蓮華文の浮彫りがある。この台座を一辺約190cmの方形に取囲む縁石が立っている。この縁石や台座は周辺の瓦敷と同時期の施工と考えられ、従って山田寺の創建当初のものとはいえないが、創建の旧位置と踏襲している可能性がある。

3) **北回廊** 金堂心から北へ約26.5mのところでは北回廊の基壇と、基壇上で8ヶ所の礎石抜取穴を検出した。回廊は梁行約3.6m、桁行は1間約4.2mの単廊である。基壇の南で雨落溝の縁石の一部を検出、それに連なっている縁石の抜取穴を検出した。基壇の北側では後世の削平で雨落溝が残っていない。回廊の基壇はL字型の後世の大溝で一部破壊されている。

4) **伽藍** 北回廊が確認されたことにより、山田寺の伽藍配置がいろいろ明らかになった。即ち、北回廊は金堂と講堂の中間にあり、結局、回廊は塔と金堂を圍繞すると考えられる。従来、四天王寺と同じ伽藍配置といわれていたが、中門・塔・金堂・講堂が中軸線上に一直線に位置する点では四天王寺と同じであるが、四天王寺では回廊が講堂に取付くのに、山田寺では回廊が金堂・塔を圍繞する点が異なっている。

5) その他 金堂周辺と発掘区の東端部で瓦敷を検出した。瓦敷は、一部で上下2段になっているので2時期以上にわたって寺域の整備があったのであろう。この瓦敷を切込んで、金堂を四圍する溝がある。埋土は大量の

瓦を含む焼土で、一部では炭化した建築部材が出土した。発掘区西北隅には、オ1次調査で検出した瓦溜りの北半部を検出した。

II 遺物の概要

1) **瓦・磚類** 軒丸瓦・檼先瓦の出土状況がオ1次調査の塔周辺と異なることが注目される。即ち、金堂周辺ではやや大型の軒丸瓦や檼先瓦の出土率が高いのに、塔周辺では、それよりやや小型の軒丸瓦・檼先瓦の率が高い。この他に大官大寺式軒平瓦、巴紋軒丸瓦が出土しているが、奈良時代以降の瓦は極めて少い。蓮華文鬼板、奈良時代の鬼瓦、鵲尾の断片が出土している。このうち鬼瓦には、顔全体に朱で彩色を施してあるものが出土している。

磚仏は4尊・12尊の連座磚仏、小型独尊磚仏が出土している。このうち裏に「勢目」の刻名のある磚仏が出土した。

2) **その他** 金属製飾金具、かなりの鉄釘が出土している。

土器は少く、瓦敷面の直上で土師器片・須恵器片が出土し、ガラス層から瓦器が出土している。

山田寺略年表

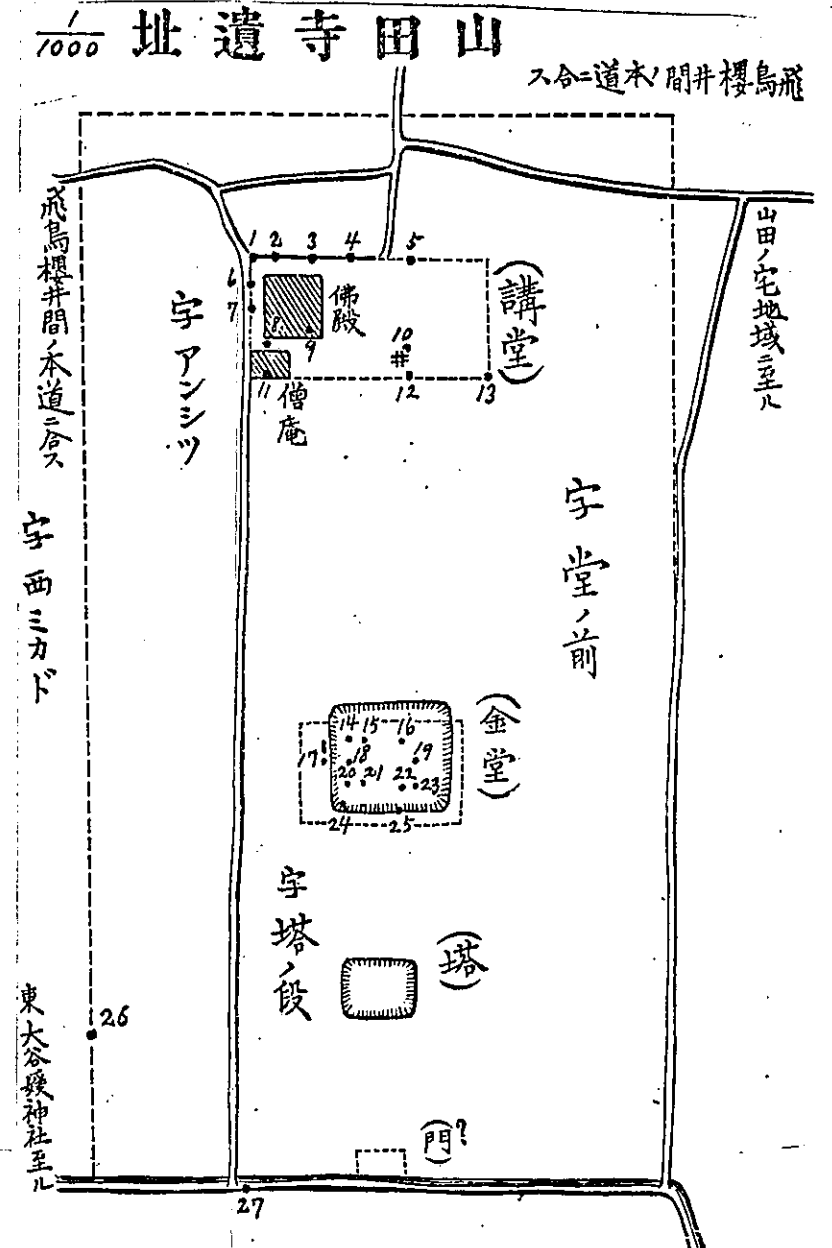
- 641(舒明13) 平地を始める
- 643(皇極2) 金堂を建てる
- 648(大化4) 初めて僧が住む
- 649(大化5) 蘇我倉山田石川麻呂自害
- 663(天智2) 塔を作り始める
- 673(天武2) 塔の心柱を立てる
- 676(天武5) 露盤を上げる
- 678(天武7) 丈六仏を鑄造する
- 685(天武14) 開眼供養を行う
- 699(文武3) 封戸300戸を施入
- 703(大宝3) 文武天皇、四大寺及び四天王、山田寺等に齋を設ける
- 1023(治承3) 藤原道長、山田に立ち寄り堂塔を見る
- 鎌倉時代 多武峯の末寺となる
- 室町時代 興福寺の末寺となる

金堂規模一覧表

	基壇の大きさ	桁行	建物の大きさ	基壇化粧	
				地覆	羽目
山田寺	71×59	三間	49.5×39.6	花崗岩	凝灰岩
飛鳥寺(中金堂)	70×58	推定五間	不明	〃	〃
四天王寺	推定61×52	不明	〃	不明	不明
橘寺	推定66×55	〃	〃	〃	〃
若草伽藍	推定72×64	〃	〃	〃	〃
川原寺(中金堂)	78×64	五間	56×40	花崗岩	凝灰岩
法隆寺	下成 74×63	五間	46.3×35.6	凝灰岩	凝灰岩

(単位 尺)

◎明治37年当時の
山田寺状況図
(高橋健自氏調査)



山田寺金堂・北回廊発掘遺構図

